

リカレント教育の重要性についての論議が高まっている。寿命が長くなり、社会の変化が激しい中で、人生のそれぞれのステージで学び続けることが重要であるというのだ。学びを怠れば、新しい知識や技術についていけなくなるだけでなく、やりがいのある仕事を失うことにもなりかねない。

私の周りには学生には次のように言うことになっている。「学校で学んだことだけで一生食べていくというのは虫がよすぎる。新しいインプットを続ける努力が必要だ」と。企業も政府もリカレント教育の重要性を再認識し始めている。岸田首相も「一人への投資」とあちこちで発言している。

このような話をすると投資としての教育や学びを思い浮かべる人が多いだろう。確かに教育は将来のためという面が強く、その意味で投資

学習院大教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

として重要ではある。それでは年齢を重ねたシニア世代にとって教育や学びは重要ではないのだろうか。そこで取り上げたいのは、投資ではなく、消費としての教育や学びのことである。将来のために学ぶのではなく、今を充実するための教育や学びの意味である。私はこれを消費としての教育と呼ぶことにしている。

私事で恐縮だが、少し時間に余裕があればうれしい。要するに消費としての学びを楽しんでいることになる。時間的な余裕ができたシニアにとって、こうした消費としての学びの意義は大きいはずだ。私の友人たちで引退した後、ゴルフや旅行を楽しんでいる人が多い。ただ、ゴルフと旅行だけで年間スケジュールを埋めるのは不可能だし、それだけで充実した生活になると思われない。文学

リカレント教育の重要性

ができたので、若い頃に勉強した専門書を時々読んでいます。専門書だから簡単に読めるものではない。文字通り、学び直しをしている。この年齢になってそうした専門書を読んだからといって新しい論文が書けるわけではない。だから投資としての読書の価値はゼロだろう。ただ、妙に充実した時間が過ごせる。何か発見があ

や歴史の本を読むのも良いし、地域の大学が提供している社会人講座に参加してみるのはどうだろうか。私の友人で敬虔なクリスチャンの人がいた。彼は晩年、大学で宗教学の社会人講座を履修していたが、自分の宗教に対する関心に深みが増したと喜んでた。金融業界で一生仕事をしていた知人は引退後に大学院

に入り、70代の後半に博士号を取得し書籍まで出版した。郷土史の研究にのめりこんで、本を出すことを目的にしている人もいる。学ぶ対象はいろいろである。

米国でシニアコミュニティ(高齢者が多く集まった居住空間)を見せてもらったことがある。その時に印象的だったのは、ブッククラブの活動が活発であったことだ。シニアが近くのファミレスに十数人集まってきて、誰かがその本へのコメントをする。それが皮切りになって、皆で感想を述べあったり、質問が出たりする。皆さん、本当に楽しそうだった。

日本でリカレント教育への関心が高まっていることは結構なことだ。ただ、投資としての教育だけでなく、消費としての教育にもっと目を向けてほしい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。